


(別紙様式第3号)

## 論 文 要 旨

論 文 題 目

Elder abuse and staff awareness in long-term care insurance  
facilities in Okinawa

(沖縄県介護保険施設従事者における高齢者虐待の実態と意識)

氏 名 國吉 緑 

## 目 的

高齢者虐待に関する研究は主に在宅高齢者虐待に関して行われており、施設内虐待の実態に関する研究はまだ充分とはいえない。

そこで本研究では、沖縄県における介護保険施設従事者の高齢者虐待に対する意識を明らかにし、施設における高齢者の人権擁護や虐待の予防・対策に資することを目的とした。

## 研 究 方 法

沖縄県内の介護保険施設167施設から無作為に94施設を抽出し、調査の同意が得られた56施設の施設従事者1307名に対し留置き法による自記式質問紙調査を行った。調査内容は基本的属性と虐待行為27項目（身体的虐待、心理的虐待、放任、経済的搾取、社会的孤立・自由の束縛、プライバシーの権利の侵害、性的虐待の7分類で構成）に対する意識、虐待行為の経験の有無である。回答を得た1070名中、回答者自身が虐待を経験した者（虐待経験

群) 432名と虐待経験のない者(未経験群) 270名、計702名を本研究の分析対象とした。

分析は、虐待経験群と未経験群における基本的属性および虐待行為27項目の意識との関連を統計ソフトウェアSPSSVer. 13.0Jを用いて統計解析を行った。

倫理的配慮として、調査票は無記名とし、施設および個人が特定されないことを口頭および文書で説明した。さらに調査票の提出は任意とし個別に封をしたものを回収した。

### 結果および考察




虐待経験群の割合を性別で見ると女性に比べ男性が有意に高く、平均年齢は虐待経験群が有意に低かった。平均経験年数および平均職場経験年数は虐待経験群が有意に長かった。虐待経験群は未経験群に比べ虐待行為27項目中5項目、「叩く」「束縛する」「嫌みを言う」「暴言を言う」「無視する」について「虐待だと思う」と回答した割合が有意に高かった。それ以外の項目についても虐待経験

群は未経験群に比べ「虐待だと思う」と回答した割合は高かったが有意な差は認めなかった。虐待経験群は意識として「虐待だと思う」としていても実態ではその行為を行っていることが考えられた。虐待経験群、未経験群共に虐待行為が起こる要因を「職場が多忙すぎる」を上位に挙げており、虐待経験群が未経験群に比べ有意に高かった。虐待経験群において虐待行為への対応として最も高かったのは「何もしなかった」で、その他に「他者に相談」「相手に謝り二度としないよう心がける」などであった。「何もしなかった」ということは、忙しくて対応そのものがない状況、虐待に対してどのように対応してよいか分からないことが推察された。

以上のことから、ゆとりのある職場の労働環境を整えることや施設従事者の高齢者虐待に対する対応能力を高めるための取組みなどが施設における高齢者虐待の予防・対策として示唆された。

(別紙様式第7号)

論文審査結果の要旨

報告番号	課程博 * 第 号 (論文博)	氏名	國吉 緑
論文審査委員	審査日	平成 19年 11月 26日	
	主査教授	近 藤 毅 	
	副査教授	宮 崎 哲 次 	
	副査教授	藤 田 次 郎 	

( 論 文 題 目 )

Elder abuse and staff awareness in long-term care insurance facilities in Okinawa

(沖縄県における介護保険施設従事者における高齢者虐待の実態と意識)

(論文審査結果の要旨)

上記論文について、その研究に至る背景と目的、研究の内容、研究成果の意義と学術的水準について慎重に審査し、次のような審査結果を得た。

1. 研究の背景と目的

高齢化社会において介護を要する高齢者のケアが重視される一方で、弱者である被介護者が逆に虐待を受ける事例が潜在的には増加しているといわれている。これまで、高齢者虐待に関する研究は在宅高齢者を中心として世話をする家族を対象に行われてきており、介護高齢者を受け容れる機関での施設内虐待の実態については、主としてマスメディアによる重大事例の散発的な報道がなされるのみであり、その一般的な状況はベールに包まれたものであるといわざるを得ない。

申請者は、高齢者のケアを担う介護保険施設の従事者を対象に行った、高齢入所者に対する虐待の実態に関する匿名のアンケート調査結果を基に、その解明を意欲的に試みており、さらに、その研究内容はプロフェッショナルであるべき介護専門職側の虐待認識の現実と潜在的な虐待リスクにつながりうる背景因子にも肉薄するものとなっている。本邦においては、ようやく2006年に高齢者虐待防止法が制定されたばかりであり、未だ一般的な介護保険施設に従事する介護専門職による虐待の実態把握には至っていないのが現状であるため、本研究は初めて施設内虐待の問題を真正面から取り上げ、かつ、それらに対して多角的かつ包括的に検討・考察を加えた先駆的研究に位置付けられる。

- 備 考
- 1 用紙の規格は、A4とし縦にして左横書きとすること。
  - 2 要旨は800字～1200字以内にまとめること。
  - 3 \*印は記入しないこと。

## 論文審査結果の要旨

## 2. 研究の内容

沖縄県内の56の介護保険施設における施設従事者に対し匿名のアンケート調査(Study Groupon the Treatment of the Elderly: 1998)を行い、虐待経験の有無に関して有効回答のあった702名(虐待経験群432名; 未経験群270名)を対象に、従事者の背景・特徴、各種虐待への認識、虐待への間接的な危険因子、対応策への意識、について比較検討し、統計学的解析を行った。

その結果、従事者の背景因子に関しては、男性が女性に比較してより高率に虐待を行っており(70.1% vs. 59.1%)、虐待経験群では平均年齢が有意に低い一方で、職務経験はむしろ長い、という特徴が浮き彫りにされた。各種虐待(27項目)への認識に関しては、虐待経験群の方が未経験群よりも高く、「不服従に対して叩く」「転落防止のためベッド上に拘束する」などの身体的虐待、「ケア提供中の乱暴な言葉」「言語的な侮辱」などの心理的虐待、「要求を無視するか遅れて応える」といったネグレクト、等に関する虐待認識においては有意差を認めた。また、全対象者を通じて、身体的・心理的・性的虐待に関しては鋭敏に虐待と認識できるが、ネグレクト・経済的搾取・社会からの隔離/自由の拘束・プライバシーの侵害といった行為に対する虐待の認識は相対的に低いことが判明した。また、虐待リスクに関与しうる従事者側の危険因子として、経験群は未経験群よりも過重労働ストレスをその要因に挙げており、未経験群では経験群よりも虐待に関する教育・訓練の不足を挙げる傾向にあった。一方、虐待への対応策に関する認識において、経験群は未経験群と比べて「何もしない」と回答する比率が有意に高く(32.2% vs. 3.0%)、未経験群においてより多くの回答が得られた「他のスタッフに相談する」「謝罪後に自己管理する」「訓練・ワークショップにより意識向上を図る」とは対照的であった。

以上の結果より、特に男性を中心に、若くして介護職に従事した経験者ほど虐待を行うリスクが高く、長期の専門職への従事がむしろ介護作業に対するモチベーションを次第に低下させ、倫理観を鈍麻させてしまう可能性が危惧された。その背景には、介護職を取り巻く労働環境の劣悪さ(過重労働、慢性的人材不足、低賃金、仕事の単調さ)が容易に推察され、図らずも今回の結果からは、虐待経験者からの「過重労働が虐待を生んでいる」「忙しくて対策を立てる余裕がない」という暗黙のメッセージが読み取れる。よって、本研究は、介護施設の労働環境整備が焦眉の社会的課題であることを示唆するものでもある。一方において、本研究からは、未だ認識が低い種類の虐待が明らかに存在することや、虐待未経験者は具体的対応策を希求する意識が決して低くはないことも判明しており、専門職へ従事する初期の段階から十分な虐待に関する啓発教育を働きかけていく予防的意義が今も依然として小さくないことが救いである。

## 3. 研究成果の意義と学術的水準

本研究は、これまで明らかにされなかった施設内介護の虐待の実態を初めて明らかにした点で重要であり、それらの背景を多角的かつ包括的な視点から捉え、今後の対応に向けて示唆となるであろう貴重なデータを提供している。虐待経験者の過重労働状況および潜在的なメンタルヘルスの悪化との因果関係は直接検証されてはいないものの、申請者は今後の研究展望の中での重要課題として確固とした認識を有しており、本研究がその基礎研究となった点については十分評価できる。よって、その学術的意義は高いと考えられる。

以上により、本論文は学位授与に十分値するものであると判断した。

備考 1 用紙の規格は、A4とし縦にして左横書きとすること。

2 要旨は800字~1200字以内にまとめること。

3 \*印は記入しないこと。